

白島STYLE

直島・豊島・男木島・女木島のアート



香川の島々の
現代アートを散策。



かがわ極上休日
自分だけの特別を見つける島旅

高岡彌生「赤かぼち」2006年 直島・宮浦港緑地

かがやくけん、かがわけん。
香川県



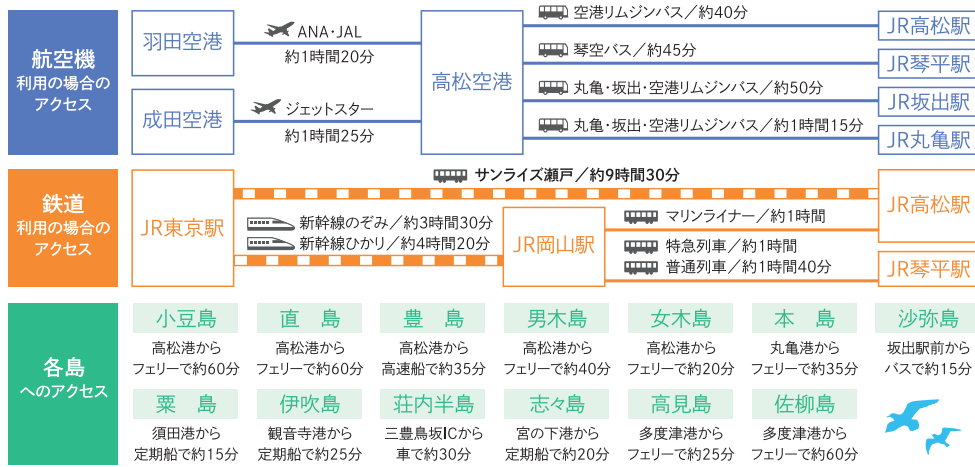
直島方面から高松港を望む



男木島から直島方面を望む



直島から瀬戸内海を望む



瀬戸内クルージングツアー 風向 株式会社 風向 営業時間 11:00~18:00 (平日のみ) TEL.087-802-2284
瀬戸の島々を巡る日帰りの旅 小豆島ツアーズ 小豆島ツアーズ合同会社 営業時間 8:00~17:00 (不定休) TEL.0879-62-9881

世界中のアートファンが訪れる アートアイランド「直島」。

ここ現代アートの聖地は、
島全体がアートのキャンバス。

江戸末期から明治にかけて来日した世界の人々から、その美しさを絶賛された瀬戸内海。そこに浮かぶ小さな島が今では現代アートの聖地と呼ばれています。福武書店（現・ベネッセホールディングス）創業者の遺志を継いだ長男・福武總一郎氏が1989年に「直島国際キャンプ場」を作ったのがそもそもの始まり。その後、「ベネッセハウス・ミュージアム」「家プロジェクト」「地中美術館」と次々にオープン。日本の原風景が残る街並に溶け込むアートから、存在感に圧倒されるような色彩を放つアートまで。今では直島は世界中から人が訪れるほどの「アートアイランド」になりました。古民家を改装したカフェや、民宿も増えてきています。直島の玄関口・宮浦港にある草間彌生の「赤かぼちゃ」、民家の並ぶ路地にいきなり現れる大竹伸朗の直島銭湯「I♥湯」など、アート好きなら一度は接したい有名な作品が島のあちこちで見ることが出来ます。アクセスも便利なので島で自由な時を過ごしながらか、アートをゆつくりと堪能できます。

直島パヴィリオン

直島の玄関口・宮浦港の新たなランドマーク。蜃気楼（しんきろう）で海面に浮いているように見える“浮き島”を表現しています。
直島・パヴィリオン 所有者：直島町 設計：藤本社介建築設計事務所

家プロジェクト

すべてが違うアート表現に思わず感動。



家プロジェクト「角屋」 写真：上野剛宏



家プロジェクト「石橋」 写真：鈴木研一

1997年、家屋を譲りたいという本村地区の住民の方からの打診で始まった家プロジェクト。城跡や寺、神社などが集まった古くからの集落をどう再生するか。町並み保存という方法でなく、現代アートによる地域活性化の可能性を広げました。



ベネッセハウス ミュージアム

瀬戸内海を望む高台に建つ安藤忠雄設計の美術館とホテルが一体となった施設。「自然・建築・アートの共生」がコンセプトです。
写真：大林匡治



地中美術館

美しい景観を損なわないよう建物の大半が地下に埋設された安藤忠雄設計の美術館。クロード・モネなどの作品が楽しめます。
写真：藤塚光政



李禹煥美術館

アーティスト・李禹煥と安藤忠雄のコラボレーションによる美術館。半地下構造の空間で李禹煥の絵画、彫刻を鑑賞できます。
写真：山本糾

島のゆったりとした時間と、アートの刺激でリフレッシュ。

直島のアート作品は「宮ノ浦エリア」「本村エリア」「ベネッセハウス周辺」の3つのエリアに大きく分類され、屋外にも多く展示されています。直島での移動は、バスや徒歩、もしくは自転車の利用が基本です。天気の良い日のアート巡りにはレンタサイクルがおすすすめ。電動付き自転車なら、まるで背中を押されているような感覚で上り坂もすいすい漕ぎ越してしまいます。途中、休憩したくなったら、島に点在するオシャレなカフェで休み。島の入り口は宮浦港と本村港の2つの港。宮ノ浦エリアの「直島パヴィリオン」は2015年3月に完成。島に訪れる人たちを出迎えます。瀬戸内海の風景に代表される大自然と融合する、現代アートや建築。ここでしか体験できない風景を心から楽しんで日常をリセットしてください。また、アートだけではなく、島の歴史や文化に触れ、島に住む人々との会話を楽しみながら、ゆつくりと流れる時に身を委ねてください。時間が許せば、ぜひ宿泊も。ここは時間がいくらあっても足りないくらい刺激に満ちたアートアイランドです。



南瓜

ベネッセハウス ミュージアムの屋外作品、草間彌生の「南瓜」。瀬戸内海を背景にした姿が美しい。
写真：安斎重男



直島銭湯「I♡湯」

島を訪れるお客様と直島島民との交流の場としてもつくられた銭湯。外観・内装にアーティスト大竹伸朗の世界が反映されています。
写真：渡邊修



アート以外にも楽しめる、
ここは魅力であふれています。

直島を知るために、
訪ねたい本村地区。

宿に荷物を置いたら、町役場や郵便局、スパーもある直島の中心地・本村(ほんむら)地区へ。ここにあるのが本村ラウンジ&アーカイブ。かつて農協のスーパーマーケットとして使用されていたところで、その基本構造をほぼ残し、建築家・西沢立衛が空間をデザインしています。本村地区で展開する「家プロジェクト」のチケットセンターも兼ねており、ガイドやインフォメーションが受けられる他、いろいろなグッズも購入可能。直島でアートプロジェクトを手がけたアーティストや建築家の書籍・関連資料も見たり、買ったたりもできます。優しい光を放つネオン管の作品、レオ・ヴィラ



建築家、三分一博志(さんぶいちひろし)氏が設計した直島ホールは、ヒノキ葺きの大きな屋根が目印です。
直島ホール 所有者:直島町 設計:三分一博志建築設計事務所

リアルの「Chasing Rainbow」を見ながらくつろげるソファもあって、直島を巡る気持ちを高めてくれます。

城跡やお寺…感動が尽きない
歴史豊かな島。

今ではアートアイランドとして有名な直島ですが、その歴史も訪れる人を魅了します。島名は平安の昔、崇徳上皇が讃岐に配流される途中で直島に立ち寄り、島民の純朴さ、素直さを賞賛して命名されたとか。戦国時代末期には高原城が築かれ、その当手を偲ぼせる空堀、土塁、郭の跡が今も残っています。江戸時代は男木島、女木島と合わせて「直島3島」と総称され、瀬戸内の地の利を生かした廻船業も盛んでした。歌舞伎や人形浄瑠璃などの公演も許可され、島内外からの一座や観客でにぎわった時もあったと言います。そのような島の歴史を知ると、訪れるたびに、また新しい感動が味わえます。

地域の人々のための、
施設にも洗練の建築美。



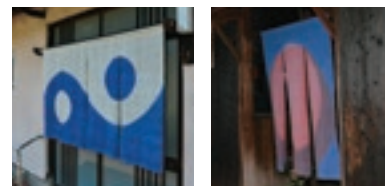
直島ホール

中世から受け継がれてきた、自然に寄り添った本村のまちなみと暮らしの在り方を研究してデザインされた町民会館です。

直島ホール 所有者:直島町 設計:三分一博志建築設計事務所

島歩きの中で見かける 「のれん」のヒミツ。

島をまわっているととても気になったのが、あちらこちらに掛けられたステキな「のれん」。染織家の加納容子さんの「のれん」プロジェクトです。本村地区の14軒の家にオリジナルのれんを制作し、軒先にかけてのが始まりです。「本村のれんプロジェクト実行委員会」が立ち上げられ、現在も「のれん」によってケとハレの日を演出し、町並みを彩る運動が継続されています。70才代中心のボランティアチームも作られ、ガイドとして来島者に説明するために現代美術を勉強されているとかで、まちの風景づくりに住人も参加している様子が伺えます。



波音を聞きながら極上のひと時を。



海のレストラン
空と海に包まれた開放的なテラス席で潮風を感じ、目の前の海に沈む大きな夕陽に感動…すばらしいロケーションに癒されます。



インテリアや建築等の空間デザインを行う「ケース・リアル」の設計により、2013年7月オープン。気持ちのよい潮風に包まれ、穏やかな海の波音を耳にするひとときに、心も体も軽やかになっていきます。

食と自然とアートの、豊かな島で過ごす休日。
豊島は「てしま」と読みます。小豆島と直島の間にあって、観光スポットも多く、二日では回りきれないほどです。潤沢な水と温暖な瀬戸内海式気候に恵まれ、ミカンやレモンの段々畑や広大なオリーブ農園もあります。初夏にはオリブの可憐な小花が色づき、その美しさは類を見ません。高松港から高速船で約35分、着いたらさっそくレンタサイクル。自転車なら潮の香りや風、景色を間近で楽しめます。島内には他にも電動自転車、シャトルバスのレンタルもあります。坂道が多いので体力に自信のない人は電動自転車を選ばれてもいいでしょう。島の最高峰である檀山に登ると、小豆島や直島、高松の街のパノラマが満喫できます。その他にも、なだらかな島の斜面に広がる唐櫃（からど）の棚田を眺めたり、青い海と白い砂浜が広がる神子ヶ浜で遊んだり、開放的なテラス席がすばらしい海のレストランで食事したり：豊島はその名にふさわしい豊かな魅力に溢れています。



家浦八幡神社

家浦港の西側の森の中にある家浦八幡神社。室町時代に豊島石(角礫凝灰岩)で建造された大鳥居は香川県では最古のもので、県指定文化財にも指定されています。



清水霊泉

弘法大師が掘ったと伝えられる名水「唐櫃の清水」(登録有形文化財)。四季を通じて湧き出る水は、地元の人々からも親しまれ大切に守られています。

マルシェで特産品を買って、豊島をさらに楽しむ。

家浦港の豊島交流センター横にあるのが「豊島マルシェ」。豊島産の海苔や棚田米のほか、レモン・オリーブといった豊島産の季節の果物が並びます。特に、棚田の風景をあしらった可愛いポチ袋や、いちご農家で丹精こめて育てられたいちごを使った「いちごソース」と「いちごジャム」はおすすめです。観光案内所である「豊島インフォメーション」を併設しているので、島の見どころや移動方法、食事や宿泊等の案内もしてくれます。島に着いたら真っ先に訪ねたいところです。



豊島マルシェ

島の歴史や文化にも、耳を傾けると新たな発見が。

豊かな水や温暖な瀬戸内海式気候に恵まれた豊島には、大昔から人が住んでいました。それを証明するのが礼田崎貝塚。西日本では最も古い部類で、およそ九千年前のものとか。他にも、縄文時代末期から弥生時代にかけての遺跡なども見つかっており、昔から新鮮な魚介類はもちろんのこと農産物を育むにも適した土地であったことが分かります。瀬戸内海交易とともに栄え、近年までおよそ千年にわたり石材業が基幹産業でした。特産品の豊島石は火や熱に強く、また加工しやすい特徴を持っています。そのため石灯笼に利用され、京

都の桂離宮や二条城、大阪の住吉神社のものが有名です。また、豊島にある室町時代に建てられた「家浦八幡神社」の石鳥居も豊島石でできています。県指定文化財にも指定されている鳥居で、香川県最古の石鳥居だそうです。島の中央にそびえる壇山には豊かな森が広がり、クスギ林が豊かな水を涵養しています。豊富な湧き水によって島には珍しい棚田を形成し、かつては島外に出荷するほど稲作が盛んでした。この壇山の東側の清水神社には弘法大師が掘ったと伝えられる湧水「霊泉越水」があります。地元の人々からは「清水」として大切に保全され、清らかな水が絶えることなく、こんこんと湧出している様はこの島の神秘を感じさせます。

ART SELECTION OF TESHIMA

2010年から開催されている瀬戸内国際芸術祭の舞台のひとつとなっている豊島では、美しい自然の風景の中で、さまざまな国の作家による作品が楽しめます。



豊島横尾館

アーティスト・横尾忠則、建築家・永山祐子による美術館。既存の古い民家の配置を生かして「母屋」「倉」「納屋」で構成され、平面作品やインスタレーションが展示されています。写真:山本朝



豊島美術館

アーティスト・内藤礼と建築家・西沢立衛による美術館。広さ40×60m、最高高さ4.5mのコンクリート・シェル構造物です。館内では水を使った作品、「母型」を鑑賞できます。写真:鈴木研一



針工場

メリヤス針の製造工場跡と、約30年間放置されていた網網漁船の船体用の木型。別々の記憶を背負った2つの存在が、アーティスト・大竹伸朗によりコラボされたアートです。写真:宮脇慎太郎



豊島八百万ラボ

改修した民家で、アートと科学のコラボレーションにより新たな神話を生み出します。今回は遺伝子組み換え蚤がつむぐ「運命の赤い糸」がテーマとなった作品を展示。写真:表 恒匡



空の粒子 / 唐櫃

空に粒子が舞うかのように円形の彫刻をつなぎ合わせた鉄の彫刻。眼下に棚田や海を望み、微かに水音が聞こえるなど、五感を愉しませます。写真:中村裕



島キッチン

空き家を建築家 安部良さんが設計・再生。「食とアート」で人々をつなぐ出会いの場です。地元のお母さんがつくったメニューが味わえます。

青い海と澄んだ海と、
アートの風景の中へ。



山口啓介「歩く方舟」 撮影・高橋公人

歩く方舟

ノア方舟のエピソードに想を得た立体作品。海や空に溶け込むよう、白と青に着色した4つの山がある方舟が、海を渡ろうと歩くさまを表現しています。



男木島灯台

明治28年初点灯の総御影石造りで現役の灯台。文化財的価値も高く、映画「喜びも悲しみも幾年月」のロケも行なわれています。



豊玉姫神社

島の人から親しみをこめて「玉姫さん」と呼ばれる、島一番のビュースポットです。

坂道と石段を登り、
歩いて集落と眺望を楽しむ島。

高松港からフェリーに乗って40分ほどで男木島へ。源平合戦の際に那須与一が射た扇が流れて着いたことから、それが転訛して男木島になったとか。隣接する女木島(めぎじま)とも合わせて、雌雄島(しゅうじま)ともいわれています。ほとんどが山地で占められ、家屋が斜面に密集して建てられています。坂道や階段が多く、島を一周しても5km程度。しかも、人とすれ違う時はどちらともなく立ち止まり、道を譲り合うほどの細かな風景に出会えるはずです。

道です。そう、集落の中を坂道や石段が迷路のように広がる男木島は歩く島なのです。歩けば歩くほど、迷えば迷うほど、男木島ならではの風景に出会えます。船を降りたら集落内の急な坂を登って村の一番高い場所にあるビュースポットである豊玉姫神社を目指します。参道に続く階段で息をついたら、ぜひ振り返ってみてください。斜面に密集した家屋と石段の間から思わす息をのむような風景に出会えるはずです。



男木交流館

屋根には8つの言語が不規則に並んでいます。建物内では島のお母さんたちがお土産や乗船券を販売しています。

男木島の魂(OGIJIMA'S SOUL) ジャウメ・フレンサ

女木島

MEGIJIMA

高い石垣「オーテ」に
守られた海辺の集落が印象的。

高松港からフェリーで20分。「鬼ヶ島」の愛称で親しまれているのが女木島です。島名は男木島と同じように源平合戦で那須与一の扇から。もともと、こちらは射た扇の壊れた残りが流れ着いたということから「めぎ(めげ)たIIこわれたの意」という島名がついたと言われています。女木島港には、堤防の上にズラリと並ぶ約300羽のカモメがいます。と言って、いつも同じ方向を向くカモメの習性を視覚化した屋外アート作品。また、港の案内所である「おのの館」近くの「おのの灯台」は高さ約2.5メートル。鬼は白い御影石できて



オーテ



鷺ヶ峰展望台からの眺望

高松港、男木島、直島、小豆島…と360度の眺望が楽しめます。

おり、とてもユニークです。この島の番のおすすすめスポットは標高188mの鷺ヶ峰山頂の展望台。見渡す限り360度の瀬戸内海の絶景は一見の価値あります。また、約2000本の桜が満開になる春は花見の名所としてたくさんの方ににぎわいます。女木島は冬になると「オトシ」と呼ばれる北西の強風が吹きます。山頂にあたり、方向を変えて吹き降りし、海沿いでは海水が波しぶきや霧状になって、家の中まで入ってきます。そのため、民家の屋根がすっぽり隠れるほどの高さ3〜4m、長さ15〜20mの防風防潮用の石垣を築いています。それがオーテと呼ばれるもので、その独特の島風景はとてノスタルジックです。



女根／めこん

女木島の人々の憩いの場として島に「根付いていくこと」への願いが込められた大竹伸朗のアート作品です。

写真：渡邊修

カモメの駐車場

フェリーが女木港に近づくと見えてくるカモメのオブジェ。風の流れとカモメの群れの習性を視覚化したアート作品です。

木村崇人「カモメの駐車場」 撮影：中村脩

別名「鬼ヶ島」、 ここはかつて鬼が住んだ島。

香川の桃太郎のモデルは吉備の国の「稚武彦命(わかたけひこのみこと)」。鬼に苦しめられている人々を助けるために犬島や猿王、雉ヶ谷に住む勇士とともに鬼退治をしたと伝えられています。そして、ここ女木島は「鬼」が住んでいた島。今も島のあちこちに鬼たちが出没しています。もともと、昔と違ってユーモラスで愛嬌があります。鬼ヶ島大洞窟は島の中央、鷺ヶ峰の中腹にぽっかりと口をあけています。紀元前に手で掘られたといわれる長さ400m、面積4000㎡の大規模な洞窟です。中には鬼がたくさんいて、桃太郎伝説の世界に引き込んでくれます。



鬼ヶ島大洞窟

この大きな看板「鬼ヶ島」は大洞窟とは反対側。手前には、船からも見える白い女木島灯台に降りる道があります。



鬼ヶ島大洞窟



激しい個性のアートと、
自然が一体となる。

